

保健看護学科成人看護学実習のグループ活動における協同的な学びの効果

松田 麗子・牧野 典子

1 はじめに

文部科学省は、平成23年3月「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」¹⁾の報告書の中で、高齢化社会や医療の高度化、実習における看護行為の制約、社会や保健医療を取り巻く環境の変化に対応できる学士課程看護学教育の課題と指針を明らかにした。本報告書によると看護学教育は、大学教育全体の課題としての「学士力の確保に向けた課題」、専門分野に関して「看護実践能力の育成における課題」に直面しているという。これらに対応する方向性としては、「主体的に考えて行動することができ」、「あらゆる場であらゆる健康レベルの利用者のニーズに対応でき」、「就労後の新人研修へ効果的に接続することができ看護専門職としての発展につながる」教育が提案されている。

近年、看護系大学に限らず大学教育全般において、学生の目的意識の希薄化や学習意欲の低下、コミュニケーション能力の未熟さが問題となっている。看護系大学における学士教育において、コミュニケーション能力は、患者のニーズに対応し、看護師や実習メンバー間の関係構築のために必要な能力として教育される。学生は、幅広い年齢層のあらゆる健康レベルの人々とのコミュニケーション能力を修得しなければならない。これまでのような同年齢同士の情報交換とは異なった、高度なコミュニケーション能力を修得する必要がある。看護系大学の場合、このような高度なコミュニケーション能力を修得する場として、臨地実習がある。

成人看護学実習（以下、成人実習とする）は、成人期の入院患者を対象に生活の援助や治療、処置に伴う看護の方法を修得する3週間の実習である。学生は2～6名のグループ単位で実習病棟に出向き、1人の入院患者を受け持って、臨床の看護師である臨地実習指導者の監督の下で、コミュニケーションを含めた看護に必要な実践能力を修得する。大学の教員は、実習指導教員として、学生が行う受け持ち患者への生活援助や観察などに立ち合いサポートする。また、学生が実践を振り返り、さらに良い実践へとつなげることができるよう、個人及びグループでの検討を促す。

一般的に臨地実習におけるグループ活動にはカンファレンスがある。ここでは、学生間で共有すべき情報や看護過程を展開する方法などを臨地実習指導者を含めて検討している。現在、実施しているカンファレンス

は、実習目標の達成に必要なグループ活動であり、課題達成に有効な方法で行われているが、グループメンバー相互の学びの場になっていない可能性がある。一部のメンバーのみが結論を導いたり、発言しない学生も存在する。そこで、カンファレンスがコミュニケーション能力修得の場になり、メンバー全員の関係性がそれによって構築されるには、どのようなグループ活動が必要かを考えた。

グループ活動の方法の一つとしてジョンソン&ジョンソン²⁾は、協同学習の考え方をういた方法を提唱している。協同学習は、単なるグループ活動ではなく互恵的な協力関係やグループ全体の目標に対して個人の責任を果たし、メンバー全員で課題を達成することに重点を置いた考え方である。また、互恵的な協力関係を促進するためには、コミュニケーション能力の修得に有効な社会的スキル³⁾を教える必要があると述べている。

先行研究では、長濱⁴⁾が大学生と専門学校生を対象とした協同作業認識尺度を開発し、妥当性を証明している。看護教育では、看護技術教育に協同学習の方法論を取り入れることの有効性を明らかにした研究⁵⁾や、授業において学生自身が設定した目標に基づいてグループ活動を行い、目標達成効果を明らかにした研究⁶⁾などがある。しかし臨地実習において、協同学習を主眼としたグループ活動を行った研究は見当たらない。そこで、本稿では成人実習の期間に研究参加者で行ったカンファレンスにおいて、教員が社会的スキルの活用を促す介入を行いながらグループ活動を行い、コミュニケーション能力とメンバー間の関係性についての効果を明らかにすることを目的とした。

2 グループ活動の概要

グループ活動の概要を資料1に示す。グループのメンバー構成は、研究に同意した成人実習グループのメンバーとした。活動の回数は、3週間の成人実習期間に10回前後で、1回のグループ活動の時間は30分前後であった。また、学生が実習で疲労していた時や、実習時間が延長した時などは実施しなかった。教員は実習時間に実習指導教員として関わった後、グループ活動にファシリテーターとして参加した。そこでは発言を控え、学生が主体的に発言し運営できるように、社会的スキルの活用を促した。

3 研究方法

3.1 調査対象

筆者らが成人実習指導教員として関わった14グループの学生のうち同意が得られた学生92名を対象とした。調査期間は平成22年1月～平成24年5月であった。

3.2 調査方法と調査内容

成人実習初日と最終日に、学生控え室において調査用紙を配布し、回収した。

用いた尺度は、協同的なグループ活動を通して学生がどのように認識しているかを測る尺度として、長濱らが開発した「協同作業認識尺度」18項目⁴⁾を用いた(資料2)。この尺度の第1因子【協同効用】は、学生がグループのメンバーと共に協同作業をすることによる有効性を示す。第2因子【個人志向】は、グループメンバーと協同して作業を行うよりも一人で作業をす

ることに価値を見出す傾向を示す。第3因子【互惠懸念】は、協同作業から得られる恩恵は人によって違いがあると捉えていることを示す。ただし、第2、第3因子については、得点を反転させたうえで、それぞれ【協同志向】【互惠効用】と命名した。調査は、5件法で回答を求めた。また、グループの関係性およびコミュニケーション能力に必要な社会的スキルの修得状況を測る尺度として津村らが開発した「ラボラトリー方式体験学習効果測定尺度」⁷⁾から下位尺度「グループへの満足度」「グループへの協力度」「他者との関係(広さ及び深さ)」「共感・協調傾向」「自己受容度」「自己効力感」「社会的スキル」(4件法, 45項目)を使用した(資料3, 表3)。この尺度は、グループ活動の効果をグループ、対人間、個人のレベルで測るものである。

資料1 グループ活動の概要

- ① 実習前のオリエンテーションで、毎日の実習後のグループ活動としてカンファレンスをおこなうことを説明しカンファレンスの目的と方法、実習前後の調査用紙について説明をした上で、参加意思を確認する。
- ② 参加意思のある学生を対象にし、調査用紙への回答を求める。
- ③ 学生は、病棟での実習を終えた後、学生控室で30分程度のカンファレンスに参加する。
- ④ 毎日のカンファレンスの内容は、その日の実習の振り返りとし、特にテーマは設定しない。
- ⑤ 参加者の役割(司会者、書記、タイムキーパーなど)は、特に決めない。
- ⑥ 教員は、コミュニケーション能力の修得を促すため、社会的スキルの活用を勧める。
(社会的スキルとして「褒める」「支援する」「質問する」「情報を与える」「助けを求める」「助けに入る」の活用を勧める)
- ⑦ 教員は、学生の社会的スキルの活用を、学生の発言や態度から見つけて、「褒める」「賛同する」などをおこない支持する。
- ⑧ 教員は、カンファレンスが学生主体でおこなわれるように留意する。

資料2 協同作業認識尺度の項目

第1因子【協同効用】

- 1 たくさんの仕事でも、みんなと一緒にやればできる気がする。
- 2 協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる。
- 3 みんなで色々な意見を出し合うことは有益である。
- 4 個性は多様な人間関係の中で、磨かれていく。
- 5 グループ活動ならば、他の人の意見を聞くことができるので自分の知識も増える。
- 6 協同はチームメートへの信頼が基本だ。
- 7 一人でやるよりも協力したほうが良い成果を得られる。
- 8 グループのために自分の力(才能や技能)を使うのは楽しい。
- 9 能力が高くない人たちでも団結すれば良い成果を出せる。

第2因子【協同志向】

- 10 周りに気遣いしながらやるより、一人でやる方が、やり甲斐がある。
- 11 みんなで一緒に作業すると、自分の思うようにできない。
- 12 失敗した時に連帯責任をとられるくらいなら、一人でやる方が良い。
- 13 人に指図されて仕事はしたくない。
- 14 みんなで話し合っていると時間がかかる。
- 15 グループでやると必ず手抜きをする人がいる。

第3因子【互惠効用】

- 16 協同は仕事の出来ない人たちのためにある。
- 17 優秀な人たちがわざわざ協同する必要はない。
- 18 弱い物は群れて助け合うが、強い物にはその必要はない。

資料3 グループの関係性

下位尺度Ⅰ【グループへの満足度】

- 1 このグループが気に入っていますか。
- 2 このグループにいることは楽しいですか。
- 3 あなたは、グループに満足していますか。
- 4 このグループは、あなたにとって居心地がいいですか。
- 5 このグループになって良かったと思いますか。

下位尺度Ⅱ【グループへの協力度】

- 6 このグループは、まとまりがありますか。
- 7 このグループでは、みんなが協力していますか。
- 8 このグループの人たちはお互いに助け合っていますか。
- 9 このグループでは、みんなが自分の意見を隠さず話していますか。
- 10 このグループには、団結力がありますか。

下位尺度Ⅲ【他者との関係(広さ)】

- 1 このグループには、気軽におしゃべりをできる人がたくさんいますか。
- 2 このグループには、休み時間などに一人っていると声をかけてくれる人がたくさんいますか。
- 3 グループには、あなたからあいさつする人がたくさんいますか。
- 4 グループワークで、このグループと一緒にグループになっても気楽でいられますか。
- 5 このグループには、話しをしたことがない人がたくさんいますか。(逆転)

下位尺度Ⅳ【他者との関係(深さ)】

- 6 このグループに、お互いのことをよく知っている人がいますか。
- 7 このグループに、自分の気持ちを素直に伝えあえる人がいますか。
- 8 このグループには、安心して悩みを相談できる人がいますか。
- 9 このグループには、秘密を話せる人がいますか。
- 10 このグループには、お互いのよいところも悪いところも言い合える人がいますか。

下位尺度Ⅴ【共感・強調傾向】

- 1 人の気持を理解しようとしている。
- 2 他の人の話をしっかり聞こうとしている。
- 3 他の人と協力しようとしている。
- 4 表情やしぐさから、その人の気持を理解しようとしている。
- 5 困っている人を助けようとする。

下位尺度Ⅵ【自己受容度】

- 6 あなたは、今の自分に満足していますか。
- 7 あなたには、「ここは絶対になおしたい」と思っている部分がありますか。
- 8 今の自分を大事にしたいと思いますか。
- 9 あなたは、今の自分をこのままでよいと思いますか。
- 10 嫌だなと思う部分も含めて、あなたは自分が好きですか。

下位尺度Ⅶ【自己効力感】

- 1 あなたは、何か得意なことをもっていますか。
- 2 何かについて、他人よりもたくさん知っていることがありますか。
- 3 あなたは、社会の役に立つ人になれると思いますか。
- 4 自分の持っている力を信頼していますか。
- 5 将来、才能のある人になれると思いますか。

3.3 分析方法

実習の初日と最終日における協同作業の認識およびグループの関係性、社会的スキルの各因子、各項目の比較検討を行った。さらに、協同作業認識得点の前後変化を上昇群と下降群に分け、社会的スキルとの関連性について分析した。

回答された点数は、協同的なグループ活動への認識が肯定的になるほど、グループの関係性が強くなるほど、社会的スキルの修得度が高くなるほど点数が高くなるように得点化して、実習前後の平均値の差を分析した。前後比較にはt検定を行い、5%未満を統計的

に有意とした。統計にはSPSSver.18を用いた。

3.4 倫理的配慮

対象者である学生には研究の趣旨について口頭と書面により説明し、研究協力は自由意志であり、いつでも研究参加を中断する権利があること、成績とは無関係であること、得られたデータは個人が特定されないように配慮することを説明した。なお、本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号210022)。

4 結果

4.1 対象者の基本属性

調査用紙の回収数は、実習前92部、実習後92部であった。前後ともに回答し、欠損値が無い81部を分析の対象とした。

性別は、男性12名（13.0%）、女性80名（87.0%）であった。年齢は21歳～23歳、平均は21.6±0.7歳であった。

4.2 協同作業の認識

協同作業認識尺度による実習前後での変化では、第1因子である【協同効用】が有意な差（ $p<.01$ ）を示した。第2因子【協同志向】と第3因子【互惠効用】においては有意な差は認められなかった（表1）。

第1因子の質問項目では、6つの項目に有意な差が見られ、「2. 協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる」（ $p<.01$ ）、「3. みんなで色々な意見を出し合うことは有益である」（ $p<.05$ ）、「4. 個性は多様な人間関係の中で、磨かれていく」（ $p<.01$ ）、「7. 一人でやるよりも協力したほうが良い成果を得られる」（ $p<.01$ ）、「8. グループのために自分の力（才能や技能）を使うのは楽しい」（ $p<.01$ ）、「9. 能力が高くない人たちでも団結すれば良い成果を出せる」（ $p<.01$ ）は、実習後の得点が有意に高くなっていた。第2因子の質問項目では、2つの項目に有意な差が見られ、「11. みんなで一緒に作業すると、自分の思うようにできない（逆転項目）」（ $p<.05$ ）、「15. グループでやると必ず手抜きをする人がある（逆転項目）」（ $p<.01$ ）は、実習後に得点が

有意に高くなっていた。

4.3 グループの関係性

実習前後のグループの関係性を検討するために、前後で平均点の比較を行ったところ、すべての下位尺度において有意な差（ $p<.01$ ）を示し（表2）、実習後の関係性は広く深くなり、グループへの協力度や満足度が強くなっていた。

4.4 社会的スキル

実習前後の社会的スキルを検討するために、前後で総得点と質問項目ごとの平均点の比較を行ったところ、総得点と7項目で実習後に平均値が有意に上昇した（表3）。

4.5 協同作業の認識と社会的スキルの関係

実習後に協同作業認識尺度の得点が高くなった55名（67.9%）を上昇群、変化がなかった2名（2.5%）を変化なし群、低下した24名（29.6%）を下降群とした。上昇群と下降群の実習前後の社会的スキルを比較したところ、上昇群が実習後に社会的スキル得点が有意に高くなっていた（ $p<.01$ ）（表4）。下降群は変化がなかった。

5 考察

5.1 協同的なグループ活動の体験による影響

成人実習の前後において、協同作業認識尺度の第1因子【協同効用】が有意に高くなっていた。学生が成人の実習期間に行ったグループ活動を肯定的に捉える

表1 実習前後における協同作業認識尺度の得点比較

尺度	mean(S.D.)		t値	
	前	後		
第1因子(協同効用)	4.09(.44)	4.37(.48)	-6.05	**
第2因子(協同志向)	3.32(.60)	3.38(.50)	-1.02	
第3因子(互惠効用)	4.05(.59)	4.17(.53)	-1.68	
$p^{**}<.01$				

表2 実習前後におけるグループ活動の効果の得点比較

尺度	mean(S.D.)		t値	
	前	後		
下位尺度Ⅰ【グループへの満足度】	3.32(.62)	3.75(.51)	-6.69	**
下位尺度Ⅱ【グループへの協力度】	3.16(.55)	3.64(.52)	-8.80	**
下位尺度Ⅲ【他者との関係(広さ)】	3.39(.52)	3.58(.44)	-3.74	**
下位尺度Ⅳ【他者との関係(深さ)】	2.91(.86)	3.14(.72)	-3.19	**
下位尺度Ⅴ【共感・協調傾向】	3.34(.39)	3.56(.43)	-4.44	**
下位尺度Ⅵ【自己受容度】	2.59(.47)	2.77(.53)	-3.76	**
下位尺度Ⅶ【自己効力感】	2.62(.59)	2.81(.60)	-4.64	**
$p^{**}<.01$				

表3 社会的スキルの質問項目と実習前後における得点比較

質問項目	mean(S.D.)		t値	
	前	後		
1. まわりの人が困っているとき、手助けできますか	3.22(.50)	3.41(.52)	-2.91	**
2. まわりの人が一人で寂しそうときは声をかけることができますか	3.12(.64)	3.38(.58)	-3.60	**
3. まわりの人が何かをうまくしたとき、「じょうずだね」などと褒めることができますか	3.38(.60)	3.56(.59)	-2.48	*
4. まわりでへこんでいる人がいたら、励ますことができますか	3.37(.58)	3.49(.55)	-1.64	
5. まわりの人が失敗したとき、なぐさめることができますか	3.35(.62)	3.47(.59)	-1.52	
6. まわりの人に感謝しているとき、「ありがとう」などと口に出して言うことができますか	3.67(.50)	3.79(.44)	-2.59	*
7. まわりの人と話をしているとき、冗談などを言って、話がはずむようにできますか	3.28(.76)	3.46(.65)	-2.27	*
8. まわりの人から悪いことに誘われたとき、断ることができますか	3.22(.74)	3.31(.82)	-.94	
9. まわりの人が対立しているとき、その人たちに話しかけることができますか	2.72(.78)	2.90(.80)	-2.19	*
10. まわりの人が誘ってくれても、嫌なことであれば、断ることができますか	2.98(.77)	3.17(.79)	-2.28	*
計	3.23(.40)	3.40(.39)	-4.07	**

n=81

p* < .05 p** < .01

表4 協同作業認識得点（上昇群・下降群）の社会的スキル得点の変化

尺度	mean(S.D.)		t値	
	前	後		
上昇群 n=55	3.24(.42)	3.45(.41)	-4.34	**
下降群 n=24	3.20(.35)	3.28(.31)	-1.25	

n=81

p** < .01

ように変化したことが示唆された。これは、学生にとってグループ活動が実習中の緊張を解きほぐし、仲間と心を通わせ力を合わせる有効な働きかけになったことを意味する。長濱⁴⁾が言うように学生には「協同作業は良いものであるという肯定的な認識が、・・・根底にあり、仲間と心と力を合わせて共に活動することは基本的に善なるものとしてとらえている」とも考えられる。協同的なグループ活動の体験は、グループ活動が自分にも仲間にも有効性があるという学生の認識を強めた可能性があり、体験による影響が示唆された。一方、第2因子【協同志向】と第3因子【互恵効用】は実習後に得点は上がっているが有意な差を示さなかった。今回のグループ活動は、グループの目標を設定してメンバーと協同して課題を達成しなければならないものではなかった。今後は第2因子【協同志向】と第3因子【互恵効用】を肯定的に変化させる様な、グループの課題を解決するためのそれぞれ個人の努力が必要で、グループの中の一員という責任を持ち、お互いが掛け替えの無い存在であることを体験できるようなグループ活動を設定する必要がある。

5.2 グループの関係性への効果

成人実習の前後において、グループの関係性がすべての下位尺度で有意に高くなっていた。グループ活動では、グループメンバーが自由に実習を振り返り、交

流することができるように、教員は「褒める」「支援する」「質問する」「情報を与える」「助けを求める」「助けに入る」といった社会的スキルを促した。それによって、学生は、メンバーが困り、つまずき、成功した体験などを聞いたときのコミュニケーション能力として、社会的スキルを学習したと考える。すなわち、学生同士が互いに尊重し支援し合うことを学び合うことによって、個人レベルでの自己受容度や自己効力感が高くなり、グループに協力や協調性が生まれたのではないかと考える。

5.3 コミュニケーション能力への効果

成人実習の前後では、社会的スキルの得点が有意に高くなり、コミュニケーション能力が修得されたことが示唆された。特に「手助けする」「声をかける」「褒める」「ありがとうと口に出して言う」等の項目の得点が有意に高くなっていることから、学習された社会的スキルは、グループ活動の場面でメンバー相互のコミュニケーションに有効に活用されたのではないかと考える。また、社会的スキルは協同作業認識尺度の上昇群において高くなる傾向が認められたことから、グループ活動における肯定的な認識を高める体験は、社会的スキルの活用を促し、コミュニケーション能力の修得に繋がることが示唆された。

6 研究の限界と今後の課題

本研究では、成人実習におけるグループ活動の効果を、活動に参加した学生のみを対象に実習前後で調査した。社会的スキルの学習はグループ活動以外の実習時間にも行われていた可能性がある。したがって、グループの関係性の向上やコミュニケーション能力の修得は、グループ活動のみの効果とするには限界がある。今後は、グループ活動に参加しない学生との比較や、活動への参加度による影響などを検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告,平成23年3月11日.
- 2) Johnson, D.W., Johnson, R.T, & Holubec, E.J.: Circles of learning. 2002/石田裕久・梅原巳代子訳: 学習の輪, 二瓶社, 2010.
- 3) Archer-Kath, J., Johnson, D.W., & Johnson, R. 1994 Individual versus group feedback in cooperative groups. Journal of Social Psychology, 134, 681-694.
- 4) 長濱文与, 安永悟, 関田一彦他：協同作業認尺度の開発, 教育心理学研究, 57. 24-37, 2009.
- 5) 永峰卓哉：看護技術教育における協同学習の効果と導入方法の検討, 協同と教育, 6. 110-112, 2009.
- 6) 牧野典子：看護学の授業における協同的な学びが目標達成に及ぼす効果, 人間関係研究, (9)85-100, 2010.
- 7) 南山大学教育養成GP推進本部(編)：平成17.18年度文科省「大学・大学院における教育養成推進プログラム」GP採択－豊かで潤いのある学びを育むために－報告書 ラボラトリー方式の体験学習を通した豊かな人間関係を目指して, 50-73, 2007.

〔 助 手 看護実習センター 教 授 生命健康科学部 保健看護学科	松田 麗子 牧野 典子〕
--------------------------------------	-----------------